

第17回

モスクワ/ロシア連邦
Moscow Russian Federation

一波乱も二波乱も ありそうな街

リクルート=スタディサプリ講師 村山秀太郎



アエロフロート航空で欧州へ

高1の三学期期末試験の翌日、初めての一人旅に出た。否、幼稚園のころ、幼児無料特権で杉並から横浜まで一人電車旅をしていたので、プチ非行少年がいよいよ飛行少年デビューしたというところか。

1979年3月のソ連アエロフロート航空は、その10カ月前に開港した成田発パリ in ロンドン out で往復20万5000円。乗り換えの旧モスクワ空港での約2時間、経済「停滞」のブレジネフ時代の待合室の照明は文庫本を読むには暗すぎ、片隅の巨大なカラーテレビに目を向ければ、翌年のモスクワ五輪の宣伝番組のオンパレードだった。1979年、ソ連が共産主義政権支援を名目にアフガニスタンに侵攻した。それに抗議し、1980年のモスクワ五輪をカーター政権のアメリカと、それに追従した西側諸国はボイコット、鈴木善幸首相時の日本もそれに倣った。

次なるモスクワ空港での体験は、ポルトガルへのアエロフロート航空。あたかも監獄のよう

にフロア全体がシャッターで封印されるトランジットホテル泊。うかつにも成田で荷物に「リスボン」のタグを付けてしまい、モスクワでは着の身着のまま宿泊する。「荷物を出してほしい」と懇願するも無視され、「せめてリスボンに届くか確認だけでもしてほしい」と哀願するもまたまた無視。社会主義官僚体制の硬直ぶりとサービスゼロの実態を20歳の1983年に思い知らされる。これが8年後のソ連崩壊の元凶だったのだが、そんな予感を抱く洞察力も透視力も私にはなかった。

行くたびごとに姿を見せる「西」

1988～91年にかけては、かなり頻繁にアエロフロート航空で欧州を往復した。89年に東ベルリンのシェーネフェルト空港での6時間を超える遅延の際も、一切の原因説明も謝罪も見通しも示されず、状況を尋ねれば「知らん！」の一点張り。私がこれまでの人生で出逢った一番のエイリアンは、アエロフロート航空関係の(旧東)ドイツ人と(ソ連時代の)ロシア人である。

ただ、こんなエピソードもある。私が西ドイツに住んでいた時期に、母が祖母を伴い遊びに来た。後で聞いた話だが、母はトランジットのモスクワ空港で、買い物に夢中になり成田行のアエロフロート機に乗り遅れてしまう。ロシア語も英語もできない母が途方にくれて出したSOSに、アエロフロート航空はモスクワのホテルと